



Data

監督: アレクセイ・ゲルマン・ジュニア

出演: ミラン・マリッチ/ヘレナ・スエツカヤ/アルトゥール・ベスチャスヌイ/ダニール・コスロフスキー/アントン・シャギン/スヴェトラナ・ホドチェンコワ/エレナ・リャドワ

■ショートコメント■

◆チラシには、「プーシキン、ドストエフスキー、チェーホフに続く現代ロシアの伝説的作家であるドヴラートフ その知られざる激動の人生、希望と共に生きた6日間を切り取る」との見出しが躍っている。また、「厳しい環境下であえぎつつも、精彩を放ち続けた作家・ドヴラートフの人生における6日間を追った」とも書かれている。

しかし、20世紀で最も輝かしいロシア人作家のひとり、ドヴラートフと言われても、私には全くチンプンカンプン。その名前を知っている日本人は少ないのでは？

そのため、当初から本作は鑑賞対象からパスしていたが、第68回ベルリン国際映画祭での銀熊賞受賞作であることがずっと気になっていたため、なんとか時間を見つけて映画館へ！

◆公式サイトによると、本作のイントロダクションには次のとおり書かれている。すなわち、

20世紀で最も輝かしいロシア人作家の一人、セルゲイ・ドヴラートフの激動の半生を、『神々のたそがれ』アレクセイ・ゲルマンを父に持つ、アレクセイ・ゲルマン・ジュニアが描く。第二次世界大戦から約25年後の1971年のレニングラード（現サンクトペテルブルク）にカメラを据え、ジャーナリストとして働きながら文筆活動にいそしんだ日々から切り取られた、ロシア革命記念日である11月7日の前日までの6日間に迫る。「雪解け」と呼ばれ言論に自由の風が吹いた社会に再び抑圧的な「凍てつき」の空気に満ち始めた時代。のちにノーベル賞を受賞する詩人ヨシフ・プロツキーらも含め若き芸術家や活動家たちのひたむきな生が描かれる。ヘミングウェイなどアメリカ文学の影響を受け、飄々としたユーモア感覚でロシア文学史においてユニークな存在となったドヴラートフ。仲間と共に苦難をやり過ごし、孤独に葛藤し、自分の人生を生き抜こうとした姿は、私たちの現在と未来に強く訴えかけるだろう。

◆また、公式サイトによると、本作のストーリーは次のとおりだ。

ソビエトで活動するロシア人作家ドヴラートフは、友人であった詩人プロツキーとともに、自分たちの才能を誇り、世間に発表する機会を得るために闘うが、政府からの抑圧によりその才能をつぶされていく。彼らはすべてをかなぎり捨て、移民としてニューヨークへと亡命する。厳しい環境下であえぎつつも、精彩を放ち続けたドヴラートフの人生における郷愁と希望の狭間で格闘した究極の6間を追った。

◆さらに、本作のチラシには、セルゲイ・ドヴラートフを中心とする登場人物の相関図がまとめられている。しかし、ドヴラートフはもちろん、その他も知らない人ばかりだ。ちなみに本作が描く、「1971年11月7日のロシア革命記念日の前日までの6日間」といえば、私がお先が全く見えないまま司法試験の勉強に没頭していた時代。1949年生まれの私は、1941年生まれのドヴラートフより8歳若い、1971年当時の将来に対する不安はソ連でも日本でも同じようなもの・・・？

もともと、大阪万博が終わった直後の1971年、日本は高度経済成長に向けてまっしぐらの時代だったから、フルシチョフの「雪解け」の時代が終わり、ブレジネフ政権の下で、再び文化への当局の監視や抑圧的な凍てつきの空気が強まっていた時代とは大違いの、「何でも自由」な時代だったから、私は今の幸せを・・・？

◆本作を観ていると、8歳の時に「俺は作家になる」と宣言したというドヴラートフが、ソ連という共産主義社会そのものや、自分が働いている工場新聞の記者としての仕事への不満にやり切れない思いを抱えていることがよくわかる。また、なぜか知らないが、彼は自分の才能に対してかなりの自信を持っていることもわかる。そのためか、本作は全編にわたって彼の不平不満のオンパレードに！しかも、それをストレートに表現できないことと、彼の文才のためか、そのすべてがいつも皮肉たっぷりの言葉の中で表現されるから、ずっとそれを見ていると多少嫌味感も・・・。

◆本作の会話中には、アメリカの作家、アーネスト・ヘミングウェイ等、誰でも知っている有名な作家の名前も出てくるが、それ以外はほとんどは知らない名前ばかりだ。本作の登場人物にとっては、彼らはそれぞれ親しみのある名前、その作品もみんな知っているのだろうが、私たち観客はほとんど知らないものばかり。しかも、ブレジネフ政権下での言論統制の実態がどうなのかもスクリーン上では全く解説されないから、本作にみるドヴラートフの不満や友人たちとの会話にはイマイチ同化できない。

しかして、本作が描いた6日間の後、ドヴラートフはアメリカに無事亡命できたそうだが、それってどうやってできたの？それもサッパリわからない。したがって、本作はベルリン国際映画祭銀熊賞受賞作だが、私にはイマイチ・・・。

2020（令和2）年7月20日記